

2017年3月12日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 23 章 1～7 節

説教：わが家は神とともにある

はじめに

牧師という立場にあつて、まもなく地上の生涯を閉じようとする方々を訪問させていただく機会があります。からだが弱りしゃべるのもつらそうな方のときは、その方の口元に耳を近づけ、一生懸命聞き取ろうとしました。また、本当に病気なのかと思うくらいお元気そうな方の場合は、冗談を言い合つて笑うこともありました。お話の内容は人それぞれです。けれども共通していることがありました。次第に心の中にあるものを語るのです。それは、長年人には語ってこなかったつらい思いであったり、人を赦せないという憎しみであったり、ときには神を信じたいと告白であったりもしました。

1 節に「これはダビデの最後のことばである」とあります。続く第一列王記を見ると、ダビデは高齢でからだも不自由になっていったようです。そんなとき、ダビデは自分の生涯をふり返りながら、イスラエルの人々に心の内にあるものを語っていったのだと思われまふ。世の王であるなら、こんな場合どんな言葉を記すでしょうか。国民からすばらしい王さまだと思われるように自分の業績を並べ立て、きらびやかなことばで飾り立てるでしょう。しかし聖書はそのような書物ではありません。続く 24 章には、イスラエルの王が神の前に罪を犯し、そのために国民がいのちを落としてしまう、そういう大失敗さえも隠すことなく記されています。そのようなわけですから、ここにあるダビデのことばも真実を語つたと考えるべきでしょう。そ

の内容をこれから見ていきます。

1 不思議なことば

1) 義をもって治める者

ここを読んでどう感じたでしょうか。なんとなくつかみ所がないと思いませんでしたか。数々の試練を通して知らされていった神の恵みを思い起こし、神をほめたたえているのだろうというところまではわかるけれど、それ以上のことはわかりにくい。

そこで今朝は、不思議に思える二つのことばに目を留めて、そこから掘り下げていきます。一つ目は 3 節です。「義をもって人を治める者、神を恐れて治める者は、太陽の上る朝の光、雲一つない朝の光のようだ。雨の後に、地の若草を照らすようだ。」

イスラエルは一年のほとんどは雨が降らず、野山を見渡しても茶色ばかりです。それでも雨が降る季節が来ると、今まで何もなかった岩山に一斉に青草が芽を出すのだそうです。私たちが春になって雪が解けて新芽が萌え出すのを見て喜びますが、それと同じです。義をもって人を治める者、神を恐れて治める者は、あのすばらしい光景に似ている。

では治める者とはいったい誰のことか。イスラエルの王のことを指しているのは明らかです。直接にはダビデのことのようにも聞こえます。もしそうなら、これはダビデの自慢話ということになる。でも、最初に申し上げました。少なくとも聖書は人の自慢話など載せることはありません。では、ダビデはなぜこのような事を語つたのか。これが一つ目の謎です。

2) 育て上げてくださる

二つ目の謎は、5 節後半です。「まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。」聞いていて何か違和感を感じないでしょうか。普通こんな言い方はしません。「私の救いと願いとを、かなえてくださる」と言うのが自然です。聖書独特の言い回しなのかと聖書を調べてみるのですが、あまり出てきません。やはり、かなり特殊な言い方です。どうしてこんな珍しい言い方をするのか。これが二つ目の謎になります。

2 エレミヤの預言 (エレミヤ 23 章 5、6 節)

1) 正しい若枝

ここだけ見ても答えはわかりません。ヒントとなる箇所は意外な所にありました。エレミヤ書 23 章 5、6 節を読みます。「見よ。その日が来る。主の御告げ。その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起す。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行う。その日、ユダヤ救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義』と呼ばれよう。」

預言者エレミヤは紀元前六百年頃に南王国ユダで活躍した人だと言われています。ですからエレミヤから見るなら、ダビデはおよそ四百年前の人になります。そのエレミヤにあるとき神が語ったことば。それが今読んだ箇所です。

これを読んでなにか気がつくことはありませんか。さきほど、ダビデが語った最後のことばから不思議と思われることばを二つ挙げました。「義をもって人を治める者、神を恐れて治める者。」ダビデが自慢して書い

たのでないとするなら、これは誰のことか。それが一つ目。そして二つ目は、「私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。」こんな言い方は普通しないはずなのに、どうしてこんな珍しい言い方をするのか。

実は、今挙げた二つのことばと同じことばがエレミヤ書のなかで使われています。「あ、わかった『治める』とか『公義と正義』ではないですか」と思ったかもしれません。もちろんそれもありますが、もっと適切なことばがあります。それは、「正しい若枝」というところです。日本語ではわかりにくいのですが、「正しい」は「義をもって治める」の「義」と同じことばです。そして「若枝」は、「育て上げてくださる」から出た同じことばです。芽を出させるとか、髪の毛が伸び始めるようなときにも使います。

2) イエス・キリスト

エレミヤは、ダビデの末として来るイスラエルの王のことを預言しました。ダビデとエレミヤとは四百年の時代の隔たりがあります。それなのに両者が同じことば同じ表現を使っているのですから、ダビデもエレミヤも、同じ方を指し示していたと考えるのは自然でしょう。いったい誰のことか。

イエスの母マリヤがまだ夫のヨセフと結婚する前、天使ガブリエルが現れ、こう告げました。「ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方のことと呼ばれます。また、神である主はかれにその父ダビデの王位をお与えになります。」(ルカ 1 章 31、32 節)

これでつながりました。ダビデもエレミヤも、ダビデの末として来られるイエス・キリ

ストのことを語っていたことになります。

3 わが家は神とともにある

1) 主に油注がれた者の生涯

ダビデは、「試練のデパート」と呼んでもいいほどありとあらゆる苦しみをなめ尽くした人です。国王に忠実に仕えていたのにも関わらず、一夜にして財産、富、地位、名声をはぎ取られ、国王に刃向かう犯罪者と呼ばれてしまいます。妻とは生き別れになり、信頼していた友人には裏切られ、最も親しかった信仰の友であるヨナタンを失い、やっとイスラエルの王として地位を固めた方と思うと、部下の妻であるバテシェバと姦淫の罪を犯し、その罪を隠すためにバテシェバの夫ウリヤを合法的に殺します。その罪は、やがてダビデの一族に暗い影を落としていきます。子どもたちの間では争いが絶えません。兄が妹を犯し、弟が兄を殺すという事件が繰り返されます。息子のアブシャロムは、公然と父を殺そうと刃向かってきました。それがイスラエルの油注がれた王ダビデの生涯でした。

2) 苦しみを通してキリストを待ち望んでいく

そのダビデが、生涯の最後にイエス・キリストが救い主として来られることを預言します。5節では、「まことにわが家は、このように神とともにある」と告白します。ダビデは優れた信仰者であったでしょうが、同時に姦淫の罪を犯し、その罪をもみ消すために優秀な部下さえも殺してしまうほどのひどいことをする人でした。すばらしい信仰を持ちながら人を殺す。そんなことがあり得るのかと疑問に思うのでしょうか。ほかの人の欠点は細かい所までよく見えます。でも自分ほど

うなのでしょう。信仰のことはともかくとして、少なくとも人妻と姦淫の罪など犯したことはない、人を殺すなどもつてのほかだ。自分はダビデよりもまだましだと言いたいかもしれません。しかし、たとえ実際に他人の配偶者に手を出さなくても、たとえ人を実際に殺さなくても、心の中で思っただけで私たちは罪を犯しているのだと言われるのです。だれがいったい無罪でいられるのでしょうか。

ダビデは信仰によって、義をもって人を治めるべきであると頭では知っていたでしょう。神を恐れながら国を治めるべきであることもわきまえてはいました。でも今言ったように、いつもできたのではない。失敗したときがありました。若気の至りで失敗したでは済まされません。晩年に至ってもダビデはなお失敗してしまう。その話しが24章に出てきます。ダビデのような信仰者でさえこのありさまで。いったい誰が主の前に立つことができるのでしょうか。誰もいません。だからイエス・キリストが私たちに必要なのです。ダビデは自分がいかに醜い罪を抱えているのかを、試練にあえばあうほど知らされていきます。人を愛することができず、油注がれた者を殺したいと願い、怒りと憎しみとで手が震えることもしばしばでした。私たちの目から見るなら、ダビデはすばらしい才能を持っているとうらやましく思うくらいです。ダビデも最初はそう思っていたでしょう。ゴリヤテを一発の石で倒すほどの勇氣と戦いの能力に長けています。ダビデを慕う人たちが沢山いました。そんなダビデでも、苦しい思いを経験するたびに自分の無力さを学んでいきます。いかに自分が罪人であるかを知らされていきました。こんな自分が救われるためには、救い主が必要であることを自覚し

ていきます。いや、必要だでは終わらない。だからこそ神は、私たちに救い主を送ってくださることを、ダビデは教えられていきました。その教えられた大切なことを、生涯を閉じる前に語ろうとして。それが今日の箇所になります。

私たちもいつか苦しみを通されます。いま、その真っ最中だという方もおられるでしょう。なぜ苦しみに会うのか理由はわかりません。世間は言うでしょう。「運が悪い。方角が悪い。お祓いをしてもらいなさい。」でも聖書はまったく異なったことを言います。苦しみに会うことは決してマイナスのことではない。私たちはやがて神のおきてを身をもって学ぶことになる。それはお金では買うことのできない貴重な宝となるのだとダビデは語りました。

ダビデは罪と苦しみの生涯の最後のときに、心から告白します。主は必ず私たちを救い出す。今たとえ見えないとしても、この方は、もうすでにわか家とともにいてくださる。自分だけが救われるのではないのです。最初自分が経験した救いの恵みは、わか家族、子孫、代々に至るまで広がっていく。

家族の中で救われているのは自分ひとりという方がいます。あるいは、まだ家族のあの人救われていないという方もいるでしょう。しかし、主の恵みはすでに皆さんを通して家族全体に注がれていることを覚えていただきたいと思います。